

## ソシユール・精神分析そしてニーチェ的転換

稲賀繁美

机の冬は、病み上がりの色できしみ、妙な屍は、新しい酒を飲むであろう。(言葉・狂気・エロス) p.116

0

自分の意志はさておき、教祖<sup>1</sup>扱いはされるだけの力量をもつ人物にとって、齢六〇代はじめは重大な転機である。螺子を巻き上げるような努力は若いころには健康法となるが、ある年齢を過ぎればかえって命取りとなる。だがいかに緊張を弛緩させつたおやかな境涯を獲得してゆくかは秘伝中の秘伝といつてよく、古来偉人と称せられるほどの人でも、そこをうまく通過できずに畢った例は多い。

丸山先生のお声を最後に耳にしたのは一九九二年一月の東京大学駒場祭での生命倫理についての講演会であった。理

とはいえ、ご自身の闘病体験を出発点としたその講演内容に偽りは無い。もうこの人はそうして見えて来た世界をこの世に伝えて燃え尽きる選択に殉じておられるのだな、ということも見えてしまった。天命もって瞑すべし。知的努力の誠実なるがゆえのむなしさ、無情さを切々と感じながら、講演後そそくさと会場を後にした。薄暗い秋の夕暮ればかりが記憶に淀んでいる。フランス語を一応は知的訓練の道具として仕事のできる人間には、このうえもなく明晰かつ必然的な論理とも映る日本語が、ごく普通の日本人聴衆にはどうしてここまで受け入れがたく、難解でわざとらしい、何ら必然性の感じられない人工的な営みとして拒絶されたり、盲目的に崇められたりするのだろうか。「半分ぐらいしか理解できなかった」という某新聞社記者の追悼記事の「思い出」があらためて切なく想起される。

1

『ソシユールの思想』という本は柄谷行人の批判をまつまでもなく(『陰喩としての建築』p.182-89)、最初から虚構として構想された本である。すなわちフランスにおける博士論文という作法は、ひたすら手続きのうえで承認された資料の利用のみを根拠として(これを実証主義と称する)、そこからありもしない完結した体系性のなかでなんらかの議論を捏造し構築してみせるという、もとより倒錯した営みである。原

路整然として、力の籠ったお話しぶりだったが、自分ではもろ分かつてしまったメッセージを若い聴衆に伝えようとする意欲のあまりだろうか、コトバそのものの構築力にあやかっで議論を進めようとする段になると、なにかしら不自然な力みが見えて、それがひどく気になった。抽象的な思弁へと跳躍するためにからだに無理を強いることが必要な代価でもあるようにみえた。あきらかに自然科学とわかる学生たちには、最初こそ熱心に耳を傾けていたが、そのあたりでついて行けなくなつて退席する。そんな反応をみて、この国でフランス的な知性を發揮することの困難を改めて思った。ヨーロッパでならばさぞかし感動を呼び高く評価されるであろう高度に強靱な思索が、いかに日本の学生には通用しにくいものか。改めて慄然とした。

典に遡つて検討すればすべての誤謬は解決される——そうした「虚構」を落ち度なく演じてみせる力量とは、日本の学問的風土のなかでは狂気の沙汰でしかない。だからこそその本が日本語で書かれたことの意義もある。フランス語で書くならば、立派な本ではあつてもその立派さは当然要求される基準に合致している以上の積極的な異常さをなんら呈してはいないからである。

日本語を日常に使っていないながらあの異様な著書を通読したほどの読者ならば容易に気付いたはずの、あちらこちらの無理。論理上の破綻を回避するがゆえのどうみてもこじつけな予定調和。その行き先はしかしながらアナグラム研究というソシユール自身を狂気の際へと追い込んだ根源的な矛盾であった。一見完璧な体系はその結節点においてすべての矛盾をかるうじて繋ぎとめる「むすばれ」(point de caison)によって支えられている。その一点に加わる負荷を最大にするがために、テーズ執筆という苛酷な作業は営々と続けられ、それにつづく論理的必然としての爆発をひそかに準備するという仕組みなのであろう。丸山氏と同世代のフランス・インテリには、テーズ執筆を終えるか終えないかで世を去つた例が少なからず知られている。だが『ソシユールの思想』の著者はその先を行く。

虚構の体系構築の作業を演じることによって、フランス的な明晰さと論理性の異常さを露呈させるといふ狂気を演じて

みせた丸山圭三郎は、その後日本の風土に自己のテーズを応用して脱構築するという輸入業者の作業まで買ってで、日本の売れっ子なら誰しも経験する自転車操業のなかで、体調を崩す。だがこれまたいわば予定調和としての調和破壊への道を、なかば自覚して突き進んでいったにすぎまい。自身のありあまる記憶力と連想力が、自身のからだの限界をあっけなく凌駕していっただけの話である。その結果が予期された大爆発の成功だったのか、それとも大爆発を回避する消耗戦の燃焼実験だったのか。いずれにせよこの矛盾はヒトがヒトたる以上引き受けねばならぬ矛盾であり、そうと悟った著述家にそれ以外の選択はない、というのが著者の明晰な判断だったのだろう。

2

あらためて著者の主要著作を通読する。ながらく構造主義かぶれの教科書屋、テレヴィ・タレントなどと仏語仏文学会の内輪で陰口を叩かれていたひとりのフランス語教育者は、『ソシュールの思想』(1981:FS)によってソシュールの手稿解説から出発した厳密にフィロロジックな仮説構築によって旧来のソシュール理解を一新し、狭義の構造主義言語学・テクノクラートの記号学ばやりの限界を突破し、あらたな文化記号発生論への可能性を開いた。それでもまだいかにもおフランス的な訓古学的論文という体裁にあまりに律義に捕らわ

文化哲学、精神分析、人類学から仏典の哲学といった領域にまで踏み込んだ、もつとも膨大な意欲作である。だが、その文明批評にはなお無理に背伸びをした浅薄な良識が散見し、また多くの引用もいくぶん不消化のまま投げ出されていて、いささか書き急ぎの気味があった。これを「生命と過剰」の第一部と位置付けして、あらたに三部作の「ライフ・ワーク」を構想した著者は、結局その第二部として『ホモ・モルタリス』(1982:HM)を上梓した後二年を待たずして「忽然と」逝去され、「テロスを求めない」ことをその「思想」とする著者のなかば計画どおり、その計画は計画のままで実現されず竟ったことになる。

『ホモ・モルタリス』はその題名——死すべき人——からしても、そこに語られる白鳥の歌の解釈にしても、死に色濃く染め上げられた書物である。数年来体の不調——ガンモドキ——に苦しんできた著者の居直った悟りの凄みすら透視されるけれども、だがそれを迫り来る予感などと形容したくはない。と同時にしかし、ひとりの誠実な学者の歩みがこのような美しい本に結実したことは幸せだと思わざるを得ない。丸山圭三郎はこの本で狭義の学問の世界の究極を踏破して、そのさき遥かにひろがる創作の世界——狭義のカタルシスではない本源的かつ危険なエロスとタナトスと「生」との競合する「生の円環」の現場——を見届け、それを精神的自叙伝たる「プロローグ」と、後世へのアレゴリーとしての遺書

れているこの恐ろしく生真面目で技術論的な手続きの小煩い著書に完全には納得できなかった筆者は、むしろ留学先で回し読みされた『思想』(一九八二年八月号)掲載の「コトバの身体性と二つのゲシュタルト」に圧倒された。そこには、コトバという余剰の獲得によって自然の外へとはみ出した狂気の動物な人間を定位する、雄大な、そしてこの雑誌にしては例外的なまでにあっけらかんとして明快な見取り図が堂々と描かれていた。その大胆な構想に接して覚えた新鮮な感動と、ここには未知なる発見への誘いがある、との戦慄だけは、いまだに忘れられない(一部改変のうえ J.S. Pp.243-68に所収)。

この構想はその後、『文化記号の可能性』(1983:FS.C)・『若波市民セミナーを母体とする「ソシュールを読む」』(1983:LS)のあとを受けた『文化のフェティシズム』(1984:FC)で肉付けされたが、これは現代文明批判を射程にしつつ、記号学説史の復習も兼ね、かつポードリヤール、ラカン、メルロー・ポンティエー、クリステヴァ、デリダといったさしあたりのライヴァルとの対決を主軸とする中間報告であり、ここでソシュールによる記号概念の解体構築の五段階の整理(図1—4四頁)が明確に打ち出される。おそらく学問的な密度は最も高いがなお舌足らずな行文もあっていささか読みにくいこの著書につづく主著が『生命と過剰』(1987:VE)であるが、これはニーチェを通奏低音として、ともいべき童話に託した「エピソード」によって遺してくれたからである。

いま初出の『文藝』にあたって確かめてみると、これらのプロローグ、エピソードは雑誌掲載の段階からきちんと印刷に付されていて、著者がこの連載にかけた決意と、覚悟までもがひしひしと伝わってくる。そしてそのあいだに挟まれた本文も、著者が私淑しつつ、著者の死の半年ほどまえに惜しまれつつ亡くなった語学の天才にして強靱な知性の具現者、井筒俊彦を意識してのことだろうか、前著の書き急ぎからは想像もされないようなたおやかで力みのない、ゆくりなくしかし高度に練りあげられ、洗練された平易な文章へと結実していて、まさに白鳥の歌とよぶべき静かな絶唱となっている。以前にはいささか一知半解の風情も見えた動物行動学や人類学、哲学にかんする知見も、確実な細部の読みとそれを自己の体系に過不足なくしかるべき文脈で取り込む技能において、おそるべき完成を現している。つづくべき第三部はもはや予告されず、またついに執筆もされなかったようだが、当初の計画はもうここで完全に凌駕されてしまったのではないか。そう納得させるに足る、今ひとつの「断絶」ともいべき円熟・解脱の境地が、この『ホモ・モルタリス』にはある。

この間、「晩年」十年間の丸山圭三郎の著作活動は尋常でない。著書に結実したものだけでも、上記の出版以外に、入

門書として『言語と無意識』(1987.L.U.)、その続編の『言葉・狂気・エロス』(1990.M.F.E.)と、講談社現代新書二冊、論文集として『欲望のウロボロス』(1986.U.D.)、講演集として『フェティシズムと快楽』(1986.F.P.)、対談集として『言語のエロティシズム』(品切れE.L.)、『文化II記号のプラックホール』(1987.T.C.)、精神分析にかかわる従来の弱点を克服すべき書き下ろしとして『欲動』(1988.P.)、旧著絶版にともない『生命と過剰』第二部への前哨となる論考を統合した『カオスモスの運動』(1991.M.C.)、廣松渉氏との対論を軸とする『記号的世界と物象化』(1993.M.S.V.)、新聞連載を中心にコラムを採録した『生の円環運動』(1992.M.C.V.)、さらには『ひとはなぜ歌うのか』(1991.P.C.O.)という、著者の知る人ぞ知る「昭和一代音楽オンチ世代」ならではの卓抜なカラオケ論といった、自称「余技」なればこそ肩肘はらぬ、しかし到底余人には書き得ぬ、エッセイスト・クラブ賞もの楽しい著作まで——そしてこれはいかに書かれなかった『生命と過剰』第三部をそれとはなく先取りしている。なお遺漏もあるが、共著、単行本無収録学術論文をも含めればとてもここに列挙できない。まさに書きも書いたり、もつて瞑すべしと言うべく、体系化を意図しつつも極力重複を厭い、だが「言いたいことは何度でもいい続け」(U.D.)て反復・転奏・転調する移ろいもまたすがすがしい(以下の引用の出典表記には以上の略号を使用する)。

亦

3

以上のようなくもがなの復習をしたのはほかでもない。こうした展開すら現在の学生諸君にはまったく無縁の過去の出来事と化しており、おまけに貧弱な図書館しかもたない一地方都市の学生にはこうした再構成すら物理的に不可能という無残な事態が厳然と存在するからである。丸山論をまとめに先立ち、試しに大学院の学生諸君を相手にその概要を解説してはみたのだが、五十年代生まれの筆者の知的環境と七〇年代生まれの現在の学生諸君のそれとの隔たりのあまりの大きさに愕然とした。かつて同年齢であった我々が、乾いたスポンジの如くに吸い込んだ知識は、いまの学生諸君にはひたすら難解で意味不明なタワゴトでしかない様子なのだ。デカンショが通用しなくなったという噂をつい先日どこかで小耳に挟んだばかりのような気がするのだが、「思想」を巡って、事態はさらに深刻——というより軽薄——な方向へと急速に地滑りを来している様子である。

かつての——そしていまはアカデミズムの一部にしか残存しない——共同体への忠誠を証しだるような高尚な作文に徹すべきなのか、それとも手っ取り早いハウ・トゥーものを求め、大学に入学すれば「バイト」とゲーセンと運転免許取得に明け暮れて、「思想」などという営みを「そういうのは無意味だから授業でやるのはやめてほしい」とリポートに

書き付ける今日の若い学生読者にも意味のあるメッセージをお模索すべきなのか。いわゆる丸山理論ほどにも明晰な構築物ですら理解しようと欲しない大多数の学生を前にして日々授業する哲学教師、学生たちが結局語学の習得を放棄するがゆえに翻訳という副業に精を出して生息できる語学教師。そんな立場で精緻な理論構築に熱中することこそ、現実からの逃避でなくて何だろうか。

だがその構築がまさにこの現実なるものの仕組みを探る営みである限りで、ここで議論は大きな円環を描いて循環している。なんらかの真理といった孤高の頂へと越境し超越することとで安心を得るのではなく、むしろそれを突き抜けて、現実という不透明なものにまつわる通念の硬直を解きほぐすこと。その仕組みをたえまなく変成させつつ作動させることで、現実を刷新すること。真理と現実と、なぜそれらはそのように容認され、通用しているのか。古くなった表皮を剥ぐように、現実を覆っている仮面を剥ぎとると何が起るのか。そしてこの「仮面」こそ日常の「現実」だとすれば、そもそも本当の「現実 *le réel*」などというものを我々は「理解」できるのだろうか。

丸山は「独楽はとまると死ぬ」とか「殻を脱がない蛇は死ぬ」といった譬えとともに、クインティリアヌスの言葉 *Damnati quod non intelligunt* (人は自分が理解できないものを、ダメなもの、間違ったものと決め付ける) をしばしば引

用した(M.F.E. p.209; P.L.O. p.184)。「分かる、分からない」「好き嫌い」になるのはいたしかたないにせよ、「好き嫌い」が「善し悪し」、さらには「正しい、誤まっている」へと化ける硬直・停滞は恐ろしい。理解できないものを「悪」として抹殺することが「正義」と見なされるからだ。だがこの硬直は、言語の世界に生きる人間には必然的についてまわる。というのも翻ってみれば、「分かる」ための前提である「分ける」行為そのものから、マコトII 真実とヒガゴトII 偽事の区分が生まれるのだから。言語という網の目によって世界を分け、分類し整理する行為、コトバによって世界をコトII 事へと分割すること、そうした「事分け」に、丸山は文化のもつ根源的なフェティシズムの起源を認め、従来の物象化論のあらたな基礎づけをなした。したがってコトバの使用と疎外とは裏腹だが、だからといってコトバ以前には戻れないのが文化的動物たる人間の定義だ。もとより粗雑な要約だが、コトバという余剰を持ったために本能がなかば破壊された動物、というのが丸山人間学の前提となる

を構める

4

いま、丸山の用語に接してこなかった読者を想定して、簡単に丸山の思索の軌跡をまとめ直す(ただしこれは浅田彰『構造と力』すら難解で理解不能、という昨今の水準に立ち返る初歩的議論であることを、あらかじめお断りする)。そ

(図1の凡例) 詳しい説明は略す。本文に参照した丸山の諸テキストとの異動ないし差異を確認しつつ解説していただきたい。大切なのは

(1) より深い (n) レヴェルにある右項がひとつ上の浅い (n-1) レヴェルにおける右項と透視され (= 右項から投資され) て、浅い (n-1) 側からの認識にあつては、両者同一物と錯視される傾向にあること。

(2) したがって、描かれた枝分れで示される3項のつくる樹状構造 (ないしはパース流の三角形) とは別に、nレヴェルの右項が n-1レヴェルの左右の項をより深いレヴェルで統合しているように見えながら (たとえば level 3 における langue と parole の統合としての level 4 の langage), その都度そこでは消化=昇華しきれない余剰を nレヴェルにおける左項へと排除 Verwerfung しつづける。つまり n-1レヴェルの抑圧は nレヴェルに内攻し、その都度反復が演じられている。

(3) つまりソシユールは各レヴェルにおける記号にまつわる錯覚を解体しようとしながら、結局同型の差異を繰り返して深化させ、根源にまで遡及して反復させる危険へと自分を追い詰めている。

(4) ここに「真理=アーレーティア (非隠蔽)」(V.E. p.17, 55, 257; M.C. p.207) への信仰を指摘することは容易い。そしてその操作の論理的破綻が精神病および/またはコトバの発生機構と同型 isomorphic であることは既に明白であろう。その論理の帰結が「沈黙」である (cf. 前田英樹『沈黙するソシユール』書肆山田 1989)。

(5) その「沈黙」を表す左下の「抹消された es」は、ヒト以前の自然 nature、つまり culture との相関物ではなく、しかも動物界の秩序たる physis としてコトバによって理解されることも拒む「それ」に相当する。それに対して右上の「抹消された es」は、Ding an sich といつてもよいし、またヒトがコトバによって錯視した「神」の占めるべき空位の位置といつてもよい。「神は生き続けている。そしてこの神とは、ひょっとしたらホモ・ロクエンシスという動物の目の背後の目である器官、皮膚の下の皮膚である器官としての、〈コトバ〉という名の荒ぶる神なのではあるまいか」(V.E. p.20; U.D. p.214; F.P. p.113; H.M. p.33)。

(6) いささか先回りして言っておけば、抹消されたこのふたつの es とは、記号によって紡ぎだされてしまったコトバの世界の裏側にその存在を要請されることとなった背後世界たる「神」の亡霊にほかならない。前者が「我々は事実そのものに遭遇することはない」(ニーチェ: F.C. p.42; U.D. p.116) と述べられる「事実」の影であり、後者が「真理とは、それなくしてはある生き物が生きることができないかもしれないような種類の誤謬である」(ニーチェ「遺稿」断章 493; F.C. p.254; V.E. p.261) という「真理」なる幻影が出現する場所だ。

の基本的モチーフからふたつ取り出そう。根底にあるのはヒトはなぜコトバを話すのか、との問いであり、表面的には伝統的な記号観の乗り越えである。後者がソシユール言語学における記号の解体過程の分析によって遂行され (F.C. pp.176-219; U.D. pp.61-62; V.E. pp.238-9)、しかるのち、前者が精神分析に結び付き、両者が統合されていった。ほぼ十年を要したその過程に思索の深化を探ろう。まず基本的な概念のおぼから始めたい。

まず、前半の記号の解体過程だが、これについては詳しく復習する代わりに、おそらく著者本人なら誤解を恐れて描かなかつた図式を呈示するにとどめ (図1)、ただちに後半の検討に移りたい。

5

欲動という言葉の定義から始めよう。(図2) 『生命と過剰』において、〈欲動 pulsion ↑ Trieb〉という概念が明白に規定される。それは人間を含む動物の本能に備わっている〈欲求 besoin〉でもなければ、また人間に特有の〈欲望 désir〉とも区別される (V.E. p.139; U.D. pp.146-47; M.C. pp.111-18)。なぜこのような区分が必要となるのだろうか。

丸山によれば〈自然界 physis〉はいわば善悪の彼岸ないし善悪以前の世界であつて、そこには動物の本能に従つた生命の営みがいわば自足した調和をもつて変転しているといえよ

図1

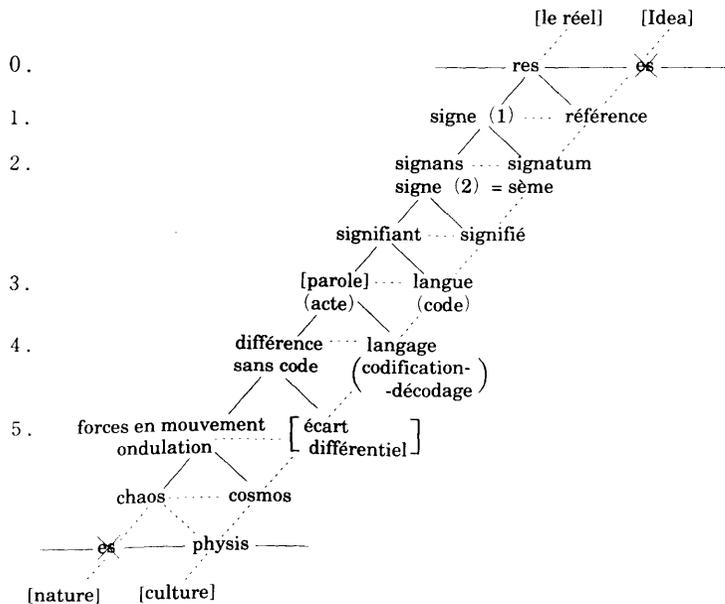
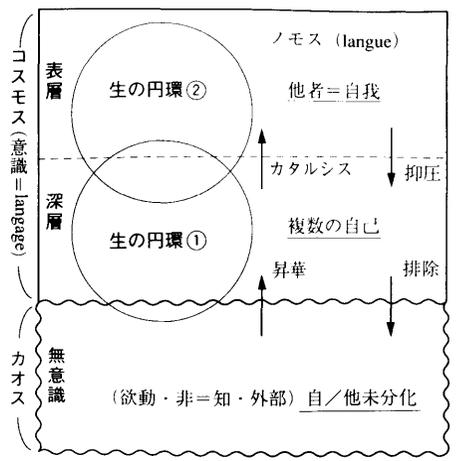


図2



セオ :

う。こうした本能に従った世界の分節を、身体における世界の見分けという意味で「身分け」と名付けたのは市川浩だ(第一分節)。有名な例としてユクスキュルの説く、あの明度、臭覚、温度覚のみによってまことに無駄なく生きるグニがある(V.E. p.72)。ところがヒトはコトバを操り、そのコトバによってモノとしての世界をコトへと切り分ける。この「身分け」が第二分節だが、それによって成立する秩序を「コスモス」と呼ぶ。ヒトはヒトとなった瞬間からこの「二重の分節」の矛盾に生きていくことになる(即ちこの定義に関する浅田彰との差異は U.D. p.21, p.61)。

ところで、この「コスモス」の成立にあつては、その秩序

と矛盾する部分はコスモスの外へと排除される。これが理解不可能なもの、つまり「カオス」となる。逆にいえば、ピュシスのなかからコスモスが出現したところで、このコスモスはピュシスからはみ出てしまい、このコスモスの側(つまりヒトの視点)から見るかぎり純粋なピュシスとはもはや判明ではない不透明な存在となり、と同時にコスモスの外部はカオスへと変貌する。いうまでもないが、ピュシスの内部に安らうかぎり、そもそも判明/不明・透明/不透明の区別は、まだ存在しない。

とすればピュシスに安らっていた本能も、コスモスの出現に並行して変質せざるを得まい。コスモスという秩序に回収されそこなつた片割れは、もはやピュシスに回帰してそこに安らうことのできない盲目的なエネルギーへと変身するからだ。これが「欲動 pulsion」にほかならない。それがコスモスの内部では昇華されたかたちで発現するが、これを「欲望 desire」と呼ぶ。したがつてこの desire は必然的に、本能の欲求 besoin とは離れた発展ないし逸脱を起こしはじめる(FC. pp.139-40)。丸山はここにヒト特有のフェティシズムの起源を見る。

次にコスモスの内部に注目すれば、『文化のフェティシズム』にあつては、「汎時的文化」たるコスモスのなかに現れる「特定共時的文化」が「ノモス」であると定義される(FC. p.90)。これをソシユールの用語に対応させれば、ヒトの言

語活動一般をさす「ランガージュ(言語能力)」がコスモスに相当するのにならして、そこにおける潜在的な文法体系なし個々の国語である「ラング」がノモスに相当する。『ラングが社会制度』なのではなく『社会がラングである』と言わなければならない(FC. p.113)。この「社会がラングである」がコスモス観とも批判される論点であるが(M.S.V. p.129, pp.180-81)、「(1)この言語活動とは、第二分節以降の象徴を用いる行為一般を指すとみて、大略問題なからう。こうした広義の言語活動(ランガージュ)において、「ペロール」とはラングの発現形態としての、個々(人)の言語行為の謂である(そのほかの論者との対論要点はFC. pp. 158-62, P.S.C. p.95, p.123, p.167, p.189 sq. ただし E.L. は未見。および丸山自身による他の論者との差異のまとめは U.D. p.22, p.27, V.E. pp.255-59)。

それでは、以上の図式を精神分析の用語と重ねるとどうなるか。この作業は『生命と過剰』(pp.199-210) さらには『欲動』(pp.67-72) において試みられる。『ソシユールの思想』からなんと五年以上の歳月が経過しているのが、むしろ意外なほどだが、まずはフロイトの用語——自我 Ich、超自我 Uber-Ich および Ego ——を確認しよう。意識をもった主体は自我の欲望を社会の規範との葛藤のなかで検閲されそれを抑圧せざるをえない。この過程で、ありうべき礼儀といった行動原則から善悪の価値判断にいたるまでの規範(現実原則)の存在が意識されるにいたる。それは自我の上部に組

み込まれ、自我にたいして検閲者として機能する。これが「超自然」と呼ばれるわけだが、それが先程のコスモスにおけるノモスと類比できることは見やすい道理だろう。いっばう、このようにコスモスの内部で社会的生活を営む自我は、超自我と対立する欲望(「快樂原則」を意識下に「抑圧 Verdrängung」することになる(ここで実際にはフロイトの「自我」概念そのものが破綻しかねないが、繁雑になるため、この点はひとまず省略する)。

これらふたつのレヴェルでの抑圧は、フロイトにあつては必ずしも明確に区別されたわけではない。だが是非の判断を意識の内部での禁令とすれば、禁令を無意識の領域へと押し込める過程はより深いレヴェルの作業となる。前者を「否定 Verneinung」(母親が子供にダメと言う場合)とすれば、後者は「否認 Verleugnung」と呼んで区別されうる。つまり日常的には叱責に對して「自分には身に覚えがない」と否認する場合であるが、これは故意の虚偽の場合もあれば、我知らず忘却した場合もあり、その本源は、思い出すと耐えられない表象を永遠に意識から追放する、より大掛かりな圧殺である。「ダメ」といわれて「否定」されたことは「抑圧 repressé」されるのに対して、「否認」はむしろ意識(つまりコトバ)からの「棄却 Verwerfung」となる。

この点をさらに掘り下げると、あらかじめコトバの領域から排除された意味不明の「それ ça」が出現する。この点

に着目して Verwerfung を定義しなおし、これを reject [棄却] の代わりに forclusion [排除] と翻訳し、両者の区別を明確にしたのはラカンである (P. pp.189-91; H.M. pp.140-41) たゞし赤間啓之の見解を参照のこと。『批評空間』No.11, 1993, pp.180-183。定義として、抑圧が神経症のレヴェルに、排除が精神病のレヴェルに対応する、という図式は理解の助けになるだろう。しかし抑圧の失敗が神経症に相当し、排除の失敗が精神病である、という見解には丸山は与せず、逆に、抑圧や排除の成功によって生の円環運動が停滞・閉塞したゆえに病は発生するのではないか、と発想を逆転させる (P. p.184, pp.192-199, p.209; M.C. pp.199-200)。

こうして意識＝コトバ＝意味作用の圏域へコスモス＜が成立するためにそこから排除されたものは、へエス＜、つまり「それ」＜としか呼べない領域に押し込められるが、これがまさに先程のへカオス＜の領域とびつたり重なり合う。すでに明らかのように、このカオスはコスモスの成立のために行われた排除の産物であるから、最初からコスモスにおける意味作用の外部である。丸山はそれがコスモスの成立と共に起る過剰——つまり自然たるビュシスに対する過剰——であることを明確にするため、へカオスモス＜なる新語を提唱していた (cf. M.C. p.115; U.D. p.26; Pp.176, とりわけ H.M. p.130sq.)。

「こうして生じたカオス」つまり M.C. 以降の「へカオスモス」は、へ欲動＜の形をとって無意識から噴出する。意識界いわばまだ必要な舞台装置もないままに先回りして検討されながら、その後になつてはじめて、この検討の前提とすべき深層心理の構造と『文化のフェテシズム』で展開されたソシユールにおける記号の解体過程との類比が展開される (VE. pp.248-89)。舞台設定が終わつてみると、そこで演じられるべき演技のほうはすでに終了していたわけだ。いわば図ができたあとでその地が判明したともいえるようか。

「」ここで発想を一八〇度転換させなければならぬ。実を言うと真のアポリアは「コトバ以前」の根拠を求めようとしたことだけにあつたのではなく、一切のものの「へ根源」もしくは「へ根拠」を志向したこと自体に根ざしていたのではなかったか」(VE.1987; p.247 および図1参照)。

「」ここにおいて『生命と過剰』はある意味で豊饒・壮大な、そして必要な——失敗作<sup>だ</sup>だったことが明らかになる。そしてこれを折り返し点として一八〇度の転換を描くためには、図と地とを入れ替えて今まではゲシュタルトの倒立した順序でストーリーをたどる、もうひとつの書物が必要となつた。それがちょうど折よく翻訳された「シュレラーバー症例」(M.C. p.134 sq.; P. p.73 sq.; H.M. p.24 sq.; 筑摩書房『ある神経病者の回想』平凡社「シュレラーバー回想録」を題材とする『欲動』である。丸山がみずから主著のひとつとは見なさず、むしろ専門的学術書 (M.F.E. p.213) と規定したこの書物が、じつは第一期(「ソシユールの思想」とそれに付随する著述)、第二期

でこそ人間はこのエスを文化の人工の網で自我化し、共同化して、「自我」のアイデンティティーを保とうと努めるが、その夢や夢想、無意識界においては、「私的幻想」が荒れ狂い、ともすればこれが日常の「共同幻想」の世界まで溢れ出ようとする。「私的幻想」の領域というのは、かくの如く下から噴き上がる「欲動」と、上から抑圧されて下りてくるもろもろの「欲望」の集積場にはかならないのである」(F.C. 1984; p.140)。

この「私という幻想」の形成される結び目が、やがてラカンを利用して「クッシヨンの綴じ目」(M.C. p.139, pp.146-49; pp.168-69; Pp.108-19; M.F.E. pp.130-36; H.M. p.33, p.131) と呼ばれることになる。

6

以上が最低限必要な舞台設定である。ところでラカンがフロイトをソシユールに沿って読み替えたとすれば、丸山は『欲動』(1989) で徹底的にフロイトとラカンの差異を究める以前に、早くも『生命と過剰』(1987) で、まだ十分に理解するために必要な資料が入手できないままに、いささか早急にラカンをソシユールの側から理解しようとした。このため、『生命と過剰』でのラカン解釈は論の構成からも、解釈においても、鮮明さになお欠ける恨みがあった。例えばラカンにおけるシニフィアン／シニフィエの定義 (VE. pp.199-210) が

〔「文化のフェテシズム」から「生命と過剰」まで〕につづく丸山第三期の端緒となる。いままでの「根源への下降」という本質志向はここで破棄され、これからは、狂気と裏腹の創造過程たる「生の円環運動」の賛歌へと方向が一八〇度転じるからである (これは著者自身による思索段階の分類 [M.C. p.259] とは必ずしも重ならない)。

そしてこの転回の隠れた、しかし決定的な要因は、「はかばか私の中のソシユールと(……) ディア・ロゴスの対話を交わすことになつた」(VE. p.276) ニーチェの存在だった。後になつて丸山はこう回顧している。「ソシユールの「ヘアナグラム」は、水平思考を垂直思考に転換させるメリットをもつてはいても、これがニーチェの「永遠回帰」が与える示唆と結びつかない限り、個体と社会の歴史における永続性へ生の円環運動」のモデルにはならなかつたのである」(H.M. pp.134-35)。その思索の枠を最後に「死」の考察に当てはめて論じたのが、事実上の遺著となつた「ホモ・モルタリス」にはかならない (H.M. p.136)。しかし材料が揃つても、それだけではまだ料理にはならぬ。

9

いずれにせよ、以上の作業を前提とすれば、『ホモ・モルタリス』に至る丸山の軌跡の転換と、その到達点たる「ホモ・モルタリス」の理論的構成を理解するのはすでに十分に

可能なはずだ (H.M. p.130 sq.)。そこで残る紙面では、丸山の提唱する『生の円環運動』(M.C.V. 1992) という構想の生成過程とその射程を探りたく (P. p.176-84; M.C. pp.242-56; M.S.V. pp.248-58; H.M. pp.133-142)。著作の題名にもとられたこの考えは、しかしながら、必ずしも最初から明確に浮上してきたわけではなかった。

たしかに、先に定義した意味でのカオスとコスモスの「円環」はすでに『生命と過剰』(1987)の終章に示唆されていた。「人間の一生は、身が言によって毀される歴史であり、身が言分けられる度に裂け目はますます大きくなってカオスが增大し、私たちはそのカオスを再び言分けていかねばならない」(V.E. p.244)。また「永劫帰帰のシンボル」としての、自らの尾を噛む蛇の形象は、『欲望のウロボロス』(1985; p.277)にも「文化と欲望のメタファー」、「自らの根拠を絶えず奪い続ける営為の象徴」として「今後の私の方向を暗示するものとして登場していた。だが、ヘウロボロス」という言葉は、ニーチェに色どられた『生命と過剰』では、ただ二箇所に散見されるのみで (V.E. p.265; p.272)、まとまった記述はなく、巻末索引にも拾われていない。

実際、『生命と過剰』の末尾には様々なイメージがいさゝか脈絡もなまま散乱していた。(1)まずニーチェの *Wille zur Macht* を「権力への意志」と訳すのは誤解とする説。「力への意志」は、既成の価値を前提とした「権力奪取」でもなければ、*Verdichtung* されたものともいえよう。どちらも「無垢」を犠牲にしてコスモスの、そしてノモスの世界を築いてゆく「成長」過程の二つの位相にまつわる、後知恵 *après-coup* としての物語 (Bildungsroman) である。

さらに(1)で著者の言わんとしたことは、ここでは引用されなかったニーチェの断章「支配欲。だが高所にある偉大なものが、へ力」を求めて下方に向かおうとするとき、どうしてそれを欲と呼ぶことができようか」(M.C. p.230-31; M.S.V. p.240)を待つてようやくはつきりする。カオスに穴を穿つ営みこそニーチェのいう「力への意志」だった、と架橋するのが著者の目論みであった。また、今村仁司によれば、レヴィイストロースはカオスに穴を穿つことからコスモスが生成するとみた (U.D. p.267)。だがむしろ、コスモスとカオスの関係は互いに相手の尾を噛むふたつの蛇なのだ、となれば、つまりヘウロボロス像にはレヴィイストロース批判も暗に込められていたことになる。

それにしても、ヘウロボロスこそ世界の縮図といった、

れば、貨幣とか名譽などを手に入れることにあるのでもなく、これまで存在しなかったものを作り出すこと、カオスを新たに言分けて意味化することにある」(V.E. p.271)。(2)さらに「深層におけるカオスの肯定は、無根拠なるが故にはじめて可能となる創造の喜びをとまなう、これまたニーチェの比喩を使えば小児の戯れにはかならない。(私個人の用語では、小児というよりもウロボロスと呼ぶものなのだが)」(V.E. p.272)。(3)最後には『莊子』の有名な「混沌に七つの穴を穿つ」話を取り上げられ、「私たちの身の深層にある混沌(カオス)に七つの穴をあける行為は、死にまで至る生の昂揚であると言えるのかもしれない」(V.E. p.275; cf. T.C. p.153)と結ばれる。だがこれら三つの繋がりはまだ不明確なままであって、翻って見れば、その後の著作、『欲動』、『ホモ・モルタリス』との距離は大きい。

ここで連想を逞しくしてみよう。(3)から(2)へと遡るには、ブルーノ・ベッテルハイムにならって白雪姫と七人の小人を考えてもよいだろう。また(2)でいう小児がラカンの言う「*objet infant*」つまり「コトバをもたない主体」(P. p.244; H.M. p.132)だとすれば、未だ自/他未分化ままの主体以前の主体が母子融合状態から切り離される際に、まさに唾棄すべきものとして欲動の領域へと棄却・排除すべき得体の知れない「対象 *object* 以前の対象」たる「*abject*」、という、クリステヴァが「汚辱 *abjection*」から造語したものの姿も彷彿と見られる。

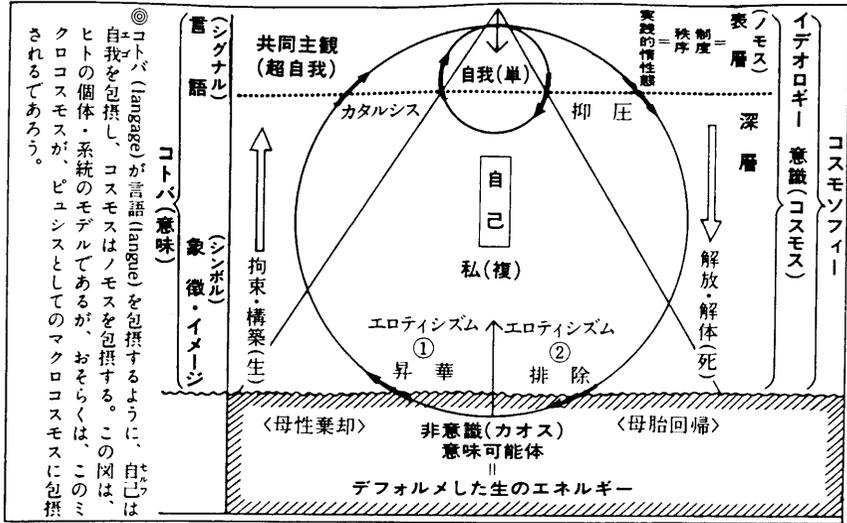
互いの根拠をつき崩しあうことで維持される (U.D. p.277) おぞましいイメージがまざまざと目の前を飛び交い始めたら、そろそろ「危ないからやめなさい」の合図だから、凡人たるものこのあたりで中断したほうが、精神の「安全」のためにはある。だが危険/安全という身分けの図式がなれば壊れているのがヒトであるからには、なお先へと「帰」せねばなるまい。

図1に示した記号の解体過程を、本文にみた図2と重ね合わせてみよう。まず「カオス」と呼ばれたものは、欲動の場である以上、精神分析の「無意識」に相当するが、丸山は井筒俊彦とともに「深層意識」という表現を好む。そのうち「ノモス」へと転化し点火される寸前の「下意識」は、抑圧された個体の「欲望」が集積する場所でもある。それより「欲動」に近く欲動のカオスがコスモスへと噴出する部分は「潜意識」と呼ばれる。

ここで「抑圧」(排除)のプロセスが問題となる。精神分析における「抑圧」は一般に「無意識内にあふれる欲動の表象群が意識系にのぼろうとするのを防衛し、締め出すプロセス」とされ、こうして「無意識に閉じ込められたさまざまな情動(＝具体的には過去の外傷体験など)を意識野に上らせ、そうすることによって抑えられていた反応を除去する(除反



生 (=死) の円環運動



スや昇華のモーメントを例えば「カラストロフィー理論」や「極構造理論」といった土台に乗せるために必要な三次元のパラメーター表示がまったく意図されていない。このことに関連する難点だが、

(4) 〈昇華〉と〈カタルシス〉の使い分けに典型的に見られるように、用語の定義と論理展開の根拠とが、互いに相手に依存した構造になっており、両者の連続性、断絶性に関する議論は思弁の域に止まっている。これ以上に練り上げてゆくと、丸山理論それ自身がノモスとして硬直する危険が明白である。『ホモ・モルタリス』はその意味でも、この方向では行き着く限界点を示しており、そのエピソードとプロローグとが、理論構築そのものよりも大切な役割を演じている点は、丸山が自分の営為に対して、理論の精緻化のみに捕らわれない柔軟性をもって接していた証拠となる (cf. VE, pp. 257-58) において丸山は「アーレテティア」から「エロティシズム」の「物語」としての「ヴェリタス」観への脱皮を提唱している。これは理論にたいする実践の忠実さであるが、それ自体がよりおおきな視野からみて自家中毒でなかったのかどうかは、別問題となる。

(5) とりわけ実践理論としての側面を考慮した場合、「始源もなく終極もない螺旋状の円環運動」を是認する立場そのものが、ある種の現状肯定論と理解される危険性をもつ。円環そのものの安定性と「革命」的事態との関係が改めて問

な

われ得る (M.S.V. pp. 99-101)。革命過程も大小の円環に沿った経過に解消されるのか。とすればパラダイム・チェインジにおける断絶も〈昇華〉(↑)〈排除〉(↓)〈カタルシス〉(↑)〈抑圧〉の四つの移行段階によって尽くされるのか。また、記号生成論の水準で丸山があらかじめ解消したはずの理論相互の〈共約不可能性 incommensurability〉にまつわる論点 (VE, pp. 150-51)、『この円環運動の複数性に関する可能性の検討のなかで、さながら抑圧されたものの回帰』よろしく再来する恐れがある (M.S.V. p. 106)。

(6) これは現実には、ラング/ノモス/自我の複数性多元性と、ランガージュ/コスモス/複数の我ないし自己の共通性一元性という、世界観(ないし丸山のいうヘコスモソフィー)のよって立つ前提の問題となる。ニーチェにも見られる〈自我Ich〉と〈自己Selbst〉(VE, p. 261)の区別、さらにはユングのいう〈集合的無意識〉(VE, p. 106, p. 142; H.M. p. 111, p. 118)つまり「系統発生のプロセスから生じた原体験の継承であり、個体が属している大なり小なりの集団(家族・社会・民族)の記憶の堆積物」(H.M. p. 112, p. 133; cf. Pp. 66)に相関する「人類の獲得形質」としてコトバ(ランガージュ)を一元的に構想する著者のイデオロギー的前提が、表面上はフロイト・ラカンに依拠した図式の背後に見え隠れする局面であるだけに (H.M. p. 143)、そこにはなお曖昧さが残っている (図 3)。

(7) また、螺旋状の円環運動とは、メタファーとしては、結局個体の発生と死という円環の連続が類としての系統発生の螺旋を形づくるというヴィジョンに還元される。この視点に立ったとき、はたしてコトバの獲得は著者の主張する隔絶性をなお証拠だてるものか。

(8) この点が、著者の西欧形而上学批判にもかかわらず、なおその伝統を引きずっている残滓とも目されよう。具体的には、ヒトその他の動物を区別しようとして動員される、ベルクソンの「演じられる記憶」と「表象される記憶」の区別 (P.S. p. 86; P.S.C. p. 65; F.C. pp. 77-78; VE, P. 189-90; M.S.V. p. 63; H.M. pp. 48-49) などがその典型だ。

(9) しかしこの仮説は、実際の身体技法の開発、稽古の心得としては有効である。とりわけピエール・ブルデューの言う〈身体化されたハビトゥス habitus incorporate〉ないし〈身体的ヘクシス hexis corporel〉が、〈構造化する構造〉と〈構造化された構造〉の二重性を説きながらも、実際には身につけた勘や、体で覚えた肉体化されたテクニクといった固着した次元へと矮小化され、〈成型作業 mise en forme〉の形成過程(型に応じて体を固める訓練の累積が行為者の相対的優位を約束する)としてとかく一方的解釈されがちなのと比べれば、無意識的に身体化された「形」を意識へと引き出してノモスたる「型」へと意識して結晶させながら、それに囚われずまたそれを破壊しては無意識へ

と忘却させてゆく循環を良しとする円環の営みには、たんに東洋的輪廻とか、アーラヤ識における「概念性の留め金を抜かれた浮遊状態」という、ラカンのヘクシジョンの綴じ目<sup>目</sup>が抜けた状態や、野口体操にも通ずる脱構築の精神状態 (M.C. pp. 154-55) や、<sup>やら</sup> <sup>やら</sup>にはイスラーム神秘主義の酔い (sakti) から素面 (sahw) へと戻る循環 (M.C. p. 176) などへ、<sup>思弁的</sup> 思弁的に還元するのでは済まされない、ひとつの生と死にたいする態度が明確に示されている。「一遍酔ってまた素面に戻った人の目から見てどうなっているのか、その構造を探る」(井筒俊彦: P. 187) 態度は、世渡りの可能性を広げる社会学的戦略や、能率一点張りの技能習得や、ひたすら記録を追求する競技スポーツではかえって隠蔽される、いまひとつの「隠された生の技法」ともいえるだろう。

3

しかし、そこで、そもそも円環というモデルに満足してよいのか。「百人一首——動くゲシュタルト」(M.C.V. pp. 165-71) を見よう。ソシユールのチェスの譬え (P.S. p. 343; U.D. p. 199 g.) の応用だが、競技カルタの百人一首では、ゲームの進行に従って「開始時の布置は目まぐるしく変わり、お互いの構造の解体をねらった送り札がしのぎを削る」と同時に「最初は『世のなかよ』と五字日まで待たなければならなかった札

が、単に、よの音で払えるようになる。記憶のゲシュタルト内での対立は、この時点で、よと zero に帰せられるからである。この円環モデルには還元できない significant と <sup>significative</sup> の躍動する相互作用と変貌の姿がある。そしてそこに「稽古」の現場がある。

2

ソシユール解釈。ニーチェ解釈。ラカン解釈。井筒俊彦用射程 (誌面の都合で省略)。

1

言語と権力。廣松渉、ピエール・ブルデューとの対比 (将来の課題)。

0

「死」をめぐる省察 (遺稿集出版を待って試みること)。

### 追記

本稿執筆の機会を提供された編集部と、編集部で紹介の労を取ってくださった廣松渉先生とに末筆ながら一言御礼申し上げる。廣松氏はピエール・ブルデュー初来日の際、今村仁司氏を含む鼎談で、言語権力発生論にかかわる話題を提供された (『現代思想』一九九〇年三月号、追って加藤晴久編『ピエー

ル・ブルデュー——超領域の人間学」(藤原書店)。そこで話題となったブルデューの著書「話すということ」は一九九三年拙訳により邦訳が出版されたが、その刊行直後にさっそく廣松氏から、まとまった言語論執筆を懇切に徳憑される長文のお手紙を頂戴した。だが、八〇年代の長期にわたる外国留学で筆者は哲学、言語論からはすっかり遠ざかり、ご要請にお応えする勇氣も時間もなく、また直後からウンベルト・エーコらとの中国移動学会への参加、オタワ、ブラジリアでの国際学会発表などに忙殺されるまま放棄していた。

今回丸山圭三郎追悼特集という、貴重にして痛切な機会を戴きながら、本稿執筆に費やせる時間の制約もあって、十年來暖めながら、またしても書き付けられなかった話題の多いことを遺憾とする。カッシーラーの「表情機能」、マイケル・ポランニーの「暗黙知」、アルフレート・シュッツの現象学的社会学、J・J・ギブソンの『生態学的視覚論』、精神分析にかんする私論などに互って、廣松氏の考察をブルデュー、丸山らの議論とも交叉させて批判的に論ずる観点などである。もはや狭義の専門とは大きく掛け離れてしまったこの分野では、今後執筆の機会はないかもしれず、備忘録に書き残すのを恕されたい。

また筆者は八〇年代いっぱい日本を留守にしていたため、世にいう丸山理論の展開に接したのも、帰国後の浦島状況においてのことにすぎない (ただフランス滞在中「ソシユール

の思想」を内藤高氏から借覽し、拙稿「La transsexualité dans l'image dite populaire au Japon」, *Ecrit-vivre*, N° 6, 1984 で言及したのは、フランスにおける Maryama 理論紹介としては最初期ではないかと思う)。今回執筆依頼を受けて急遽入手可能な著作を通覧したものの、こうした事情のため、単行本未収録の雑誌論文など、遺憾ながら確認しえていない。基本的論点の復習に終始し、かつ誤謬・曲解の多いことを懼れ、今は亡き著者にお詫び申し上げる。

「いながしげみ 三重大学教員 一九五七年東京生 美術史/フランス文学/比較文化 訳書ピエール・ブルデュー「話すということ」(藤原書店) 共著に「ルドン」(朝日新聞社)、「歌麿」(新潮社)、「世界美術大全集」(小学館: 二二、二三巻) など、藝術史および藝術学の批判的・社会的研究、異文化交流と誤解の認識論 (オリエンタリズム批判)、藝道 (武術・剣術) 伝承の知識社会学的研究および実践などを模索中」

◇編集後記を書く段になっていつも困ることがある。平常の月の場合はどうということはないのだが、新年号だけはどうもいけない。ウソでも良いから希望をもてるようなことを書きたいと思うのだが、これを書いてるのは、未だ十二月にさしかか

といつてどうということはありませんよ。日本型零細家内企業の強さなのかも知れないなどと、苦笑いを書きながら答えてしまう。

◇解雇や賃金カットと闘っている人には申し訳ないが、今の人がかえって、日本人の精神衛生上は良いのではないかなどと考えたりもする。ひと昔まえのバブルでの人々の浮かれようが、未だに頭から離れないため

だろ。衣食足りて礼節を知るというコトバがあったが、本当は逆で、衣食が足りると人は横暴になつたり、ものを考えなくなるのではないか。これはなにも、我が社の経済事情からくる強がりばかりで言っているのではない。

◇世の中は不況が深刻化している。そのせいか、「情況」も経営が大変でしょう」とか、「どうやって維持できているのですか、ガンバツて下さい」などという激励を受けることが多くなつた。励ましていただいて大変うれしいのだが、そんなとき、「もともと社会的水準以下の貧乏会社のことだから、不況になつたから

◇本号は、丸山圭三郎の哲学について特集したが、岩田昌征氏のユーゴ論一八〇枚を、思い切つて一挙に掲

載した。これは、「情況」の歴史からいうと、第一期の長さである。明石康が国連のユーゴ代表となることが先日発表されたが、バルカンが世界の火薬庫であつただけになにか怪しげな足音も聞こえてくる。こうした中で、岩田氏の原稿をお届けすることはジャーナリストとしても誇り得ることだろう。この論文は氏の三十年來のユーゴとのつきあひの結実であることはいまでもないが、民族と宗教、そして第二次大戦と社会主義の崩壊という矛盾の中に苦闘するバルカン半島の問題を如実に伝えてくれる。読んでいくうちに、実はそれは、この日本の問題でもあることに気づいた。力作である。(K)

情況

一九四四年月号  
(第一期第幾月号)

一九四五年一月日発行

【発行】情況出版株式会社  
東京都中野区東中野一四七番

電話〇三三九七五  
フアクシミリ〇三三九七五

振替東京〇宛を  
【編集発行人】古賀 運

【印刷製本】株式会社 平河工業社  
【特価】二〇〇円 本体六角半  
雑誌代五十

投稿は責任をもつて目を通しますが、返却はいたしませんので、コピーをとりお送り下さい。

次号予告

特集Ⅱ全共闘―叛乱から二十五年

◇竹田青嗣◇桂秀美◇笠井潔◇最良  
悟◇塩川喜信◇榎原均◇野崎六助◇  
今井澄◇鈴木貢◇袖岡禎正◇表三郎

◇高橋信弘◇本山美彦◇資料・山本  
義隆・海老坂武・秋田明大・清水多  
吉・秋山駿 他